

C型肝炎とは

C型肝炎とは、C型肝炎ウイルスが原因で起こる肝臓の障害です。ウイルスが肝臓から排除されない限り何時までも肝臓の細胞が破壊されてしまう、慢性、進行性の病気です。原因は感染した人の血液が体内に入る事ですが、これには輸血、血液製剤を始め、覚せい剤などの回し打ち、以前の不衛生な中での注射やワクチン接種などがあげられます。中には全く原因と思われるものが見当たらない場合もあり、検診などで偶然に見つかる事も少なくありません。通常はウイルスが入ると急性肝炎を起こすのですが、軽度の事が多く、殆どは気が着かずに終わってしまいます。A型やB型肝炎ウイルスは急性肝炎を起こすと殆ど排除されてしまうのですが、C型肝炎ウイルスは排除されず殆どの場合持続感染になってしまいます。そしてウイルスがいる肝細胞が破壊され続けていく状態が慢性C型肝炎です。肝臓は再生する力が大きい為、始めのうちは破壊されても直に細胞は再生されるのですが、やがて再生する能力も限界になり壊れても再生できなくなります。こうなると肝臓は壊れるだけの状態になってしまいます。壊れた部分は硬い繊維に置き換えられる為、慢性肝炎の進行と共に肝臓は硬く小さくなって行きます。この状態が肝硬変です。肝硬変で残っている肝細胞は長年の炎症の影響で細胞の遺伝子に変化を起こしたものが多く、発癌の危険性が高くなってきます。従って肝硬変の状態では高い頻度で肝臓癌が発生してきます。C型肝炎から肝硬変になった場合は特に発癌頻度が高く、一個の癌を治療しても後から後から新しいものが出来てくるといった特徴があります。此処まで来ると殆どの生活を病院での検査と入院治療の為に費やさないといけないという状況になってしまいます。従ってC型肝炎の一番の治療目的は肝硬変に進展する以前の段階でウイルスを排除する事になります。B型肝炎の場合ウイルスが自然に消える事もありますがC型肝炎の場合はまず自然にウイルスが消える事はありません。現時点ではインターフェロンという薬でウイルスを排除する以外にはありません。最近ではインターフェロンも改良され、更にリバビリンという薬と一緒に使うことで以前よりも格段に治療効果は上がっています。10年前には治らないとされていたような患者さんでも完治する例が多くなっています。しかし、同じインターフェロン治療でもC型肝炎が進行すると治療効果が目立って低下してきます。特に肝硬変になるとインターフェロンが効きにくいだけでなく、副作用の頻度も高くなり、程度も強くなってきます。また、既に癌の芽が出来ている可能性も高いため、ウイルスが排除されても発癌の危険性は残ります。ですから、C型肝炎と言われたら、出来るだけ早い段階で受診して進行しないうちにインターフェロン治療を受ける事が重要になります。インターフェロン治療は1回ではウイルスが消えなかった人でも、繰り返し治療するうちに消えてしまう傾向があり、一度で成功しなくても繰り返し治療する事で完治も目指せます。従って、なるべく早いうちに治療する事が必要です。受診時既に肝硬変であったり、他の理由でインターフェロンが使えない場合もあります。その場合はウイルスを排除する治療法ではありませんが、肝臓が壊れるのを抑制する薬による治療が主体になります。肝臓癌を合併している患者さんでは癌の治療が優先になります。昔から肝臓は沈黙の臓器と言われます。これは相当末期にならないと症状が出ないと言う事からきています。慢性肝炎のうちは言うに及ばず、肝硬変でも末期にならないと症状が出てきません。したがって症状が出てきた段階で治療をしても遅きに失してしまいます。C型肝炎と言われたら、症状の有無、肝機能の良し悪しに関わらず必ず受診するようにお願いしたいと思います。